

<b>Title</b>	英語遊離数量詞研究の分析
<b>Author(s)</b>	寺田, 正義
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 13(2): 91-110
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=495">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=495</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 英語遊離数量詞研究の分析

寺 田 正 義

Some Analyses of the Studies of Floating Quantifiers in English

Masayoshi TERADA

This article discusses some of the epoch-making studies on floating quantifiers published in recent years. These studies include Maling (1976), Sportiche (1988) and Baltin (1995), all of which have had tremendous impact on subsequent studies concerning floating quantifiers. Maling analyzes the behavior of floating quantifiers on the basis of the theory of transformational analysis. Though transformational analysis has been considered an outdated theory, Maling's proposal has turned out to be far-sighted, from which Baltin (1995) has derived no small benefit. Sportiche's VP-Internal subject hypothesis throws light not only on the subsequent studies of floating quantifiers but also on the framework of the syntactic theory. Though Sportiche discusses mainly French floating quantifiers, his treatment has been found to have wider relevance, particularly concerning the behavior of floating quantifiers in English.

In the final section, I will make a proposal concerning the appositive relations between the NP and floating quantifiers of English.

### 1. はじめに

英語の遊離数量詞（以下、FQ）の振舞いは複雑で、これまでに数多くの優れた論文が発表されてきたにもかかわらず総括的な説明に成功したと見做されるものはないように思われる。この小論では、それぞれの時点での最高水準を示したと目されている3つの論文、すなわち、Maling (1976), Sportiche (1988), Baltin (1995) を主として分析し、最後にFQの同格性に着目して新しい提案を試みる<sup>(1)</sup>。

FQをめぐる議論は次の3点に集約できるように思われる。

---

**Key words;** Floating Quantifiers, Subject-control Predicates, Object-control Predicates, VP-Internal Subject Hypothesis, Appositive Relations

- (i) F Qと先行詞の種類(名詞であるか代名詞であるか)との関係をめぐる問題。
- (ii) 主語とVP内にあるF Qとの関係をめぐる問題。
- (iii) to不定詞とその前後に生じるF Qとの関係をめぐる問題。

上記のMaling (1976) は (i) を, Sportiche (1988) は (ii) を, Baltin (1995) は (iii) を主として論じている。

数量詞には, all, both, each, everyなどの普遍数量詞と, any, many, most, someなどの存在数量詞があるが, 遊離可能な数量詞は普遍数量詞のうちのall, both, eachに限られる。everyはevery oneの形では遊離可能となるが, every単独では遊離しないので以下の考察からは除外する。日本語の数量詞では普遍数量詞のみならず存在数量詞も数詞も遊離が可能であるだけでなく二重の量化さえ可能であるような振舞いをする<sup>(2)</sup>。しかし, 英語では普遍数量詞のみに限られるわけである。英語では, なぜ普遍数量詞のみが遊離可能なのか, その理由についての考察はいままでほとんどなされていない。このことについては最後の節で言及する。

## 2. Maling (1976) についての分析

Maling (1976) は変形規則の一部である右方移動規則に基づいて, 同じ立場に立つPostal (1974) の数量詞遊離の提案を批判し, 改訂案を出している。

- (1) a. I believe the soldiers both to have left.  
b. I believe them both to have left.
- (2) a. I believe [<sub>NP</sub> the soldiers][<sub>VP</sub> both to have left].  
b. I believe [<sub>NP</sub> them both][<sub>VP</sub> to have left].

Postalは, (1a)と(1b)とは表面上は似ているが, 構造は(2a)と(2b)のように違う。すなわち, (1a)のF QであるbothはVPの一部であり, (2b)のF Qであるbothはthemと1つの構成素を形成していると考える。Postalによれば, この派生は第一段階としてQ-Floatingにより(3a), (3b)が得られ, 続いて代名詞(つまり, ここでは(3b))の時のみQ-Pro Attachmentという再調整の変形が適用されて(2b)になるというものである。Postalによれば, Q-Pro Attachmentは数量詞が代名詞に接語したものであるということになる。

- (3) a. I believe [the soldiers] both to have left.  
b. I believe [them] both to have left.

英語遊離数量詞研究の分析

これに対して Maling は、代名詞だけが Q-Pro Attachment 変形を受けるというのは説得力がない、と言う。(4)にあるように、一般に母音弱化は代名詞に起こるものであるから (4b) は非文となり、代名詞の方が数量詞に接語されると考えるのが自然であり、Postal の考えは逆であると指摘する。

- (4) a. I like them ALL. (大文字の方に強勢がかかると考えていただきたい)  
 b. \*I like THEM all.

Maling は、要約すると(5)のような改訂案を提案している。

- (5) 先行詞と数量詞が表層構造で個別の、つまり、2つの構成素を形成している場合には Q-Floating が関わり、先行詞よりも右方に遊離した F Q はそれに後続する構成素と結びつく。この場合の先行詞は代名詞であっても、代名詞でなくてもよい。先行詞が代名詞で、数量詞と合わせて1つの構成素を形成している場合には Q-Pro Flip が関わる。

Maling は(6)のような表を提示している。

(6)	NP [- P r o]	NP [+ P r o]
Source	all of the men both of the men each of the men	all of them both of them each of them
of-Deletion	all the men both the men	* all them * both them
Q-Pro Flip	適用されず	they/them all they/them both
Q-Floating	the men all the men both the men each	they/them all they/them both they/them each

## 英語遊離数量詞研究の分析

Maling の説明によれば、Q-Pro Flip が適用されるのは all と both に限られ、each は除外されるといふ。Postal は all/both と each の振舞いの違いの例として(7)を挙げておきながら、なぜそうなるかは説明していない。しかし、Q-Pro Flip によって正しく予測される、と Maling は言う。

- (7) I called them all/both/ \*each.

Postal は Q-Floating が適用されるのは主語を修飾する数量詞に限るとしているが、Maling はそれに対する反証の例として(8)を挙げている。これは、F Q は V P 内にも生じることを意味している。

- (8) a. I gave the kids all some candy to keep them quiet.  
b. The tooth fairy promised the kids each a quarter.  
c. Dad bought the twins both bicycles for Christmas.  
d. Mom found the boys all so dirty when she got home, that she made them (all) take a bath.  
e. We consider the Joneses both unbearably pompous.  
f. Cinderella's fairy godmother turned the pumpkins all into handsome coaches.  
g. He made his money all in Platypus Platinum.  
h. He looked the twins both in the eye (and said...)  
i. She called the men both bastards.  
j. Hang your coats all/both up on hangers.

Maling は Q-Floating が適用されるためには数量詞が遊離できる要素、いわば引っ越し先が右方になければならず、それは NP, AP, PP, VP のいずれであってもよい、と述べている。しかし、どのようなものでもよいのではなく、(9)のような例は非文となる、としている。

- (9) a. \*I saw the men all yesterday.  
b. \*She found the missing books both quickly.

なぜ(8)が容認され、(9)が非文となるかについて、Maling は構造的な制限のみならず、なんらかの意味的な制限があるのであろう、と述べるに止めている。この点に関して、Baltin (1995, 210 & 219) は Maling (1976) に言及して、(8)が容認されるのは前置詞付き与格及び間接目的語が F Q の後にあるからであり、(9)が非文となるのは副詞の表現が F Q の後にあるからであると補足的な記述をしている。

Maling (1976) の分析を終えるにあたり、若干補足しておきたい。これは後の節とも関連を持つ

ものである。

Maling が統率・束縛理論以前の生成文法理論に基づいて議論を展開したことは理論的時代背景からしてもやむをえざることはあったが、しかし、現在の理論にも通じる先見性を持った示唆が与えられていることに注目する必要があるであろう。

第1点として、Postal は、数量詞の遊離は主語を修飾する場合に限るとしたのに対して、Maling は目的語との関わりで、VP内でも数量詞が遊離することを(8)のような例を挙げて説明していることである。これは現在広く受け入れられているFQのVP内基底生成仮説と符号する。

Maling (1976, 715) は注の中で、(10)の例を挙げて、基底部に関して移動変形では解決できない問題のあることを指摘している。これはVP内基底生成説の出現を予感させるものである。

- (10) a. \*I found all (of) John and Mary and Sue.  
 b. I found John and Mary and Sue all sitting on a park bench.  
 c. I found John and Mary and Sue all utterly incompetent.

第2点として、Postal のQ-Pro Attachment の代案としてMaling が提案したQ-Pro Flip は現在では時代遅れの提案のように見えるが、基底生成説では解決できそうもない数量詞のある種の振舞いを巧みに説明していると考えられることである。(11)は筆者(寺田)の収集したものであるが、基底生成説では説明できないであろう<sup>(3)</sup>。

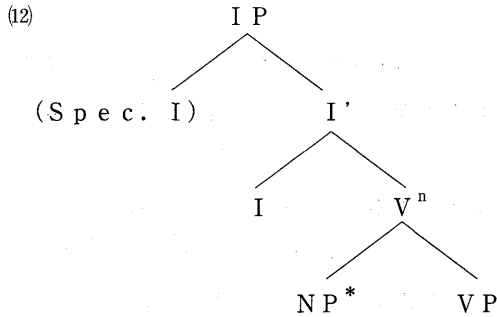
- (11) a. The eyes of them both were opened. (*The Authorized Version of the Bible* 以下 AVB)  
 b. In front of them all, speak to the rock and it will yield its water. (*The New English Bible* 以下 NEB)

### 3. Sportiche (1988) についての分析

#### 3.1 VP内主語仮説

Sportiche (1988) は、Koopman and Sportiche (1987) において提唱したVP内主語仮説に基づいて主としてフランス語のFQの振舞いを説明している。FQの問題に入る前にVP内主語仮説を概観しておきたい。

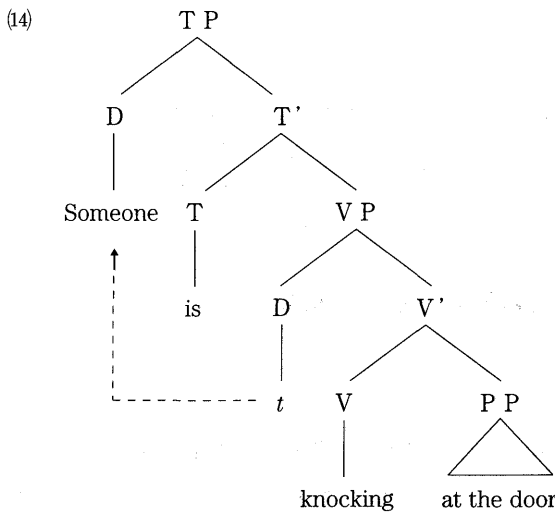
(12)において、 $V^n$ はX<sup>n</sup>パー理論におけるある種の投射を表し、NP\*を主語に、VPを述部を持つ小さな節を形成している。そして英語やフランス語などは、NP\*は表層構造では(Spec.I)の位置に左方移動するものと考えられる。



Radford (1997) は Sportiche の V P 内主語仮説の妥当性は数量詞構文以外の構文でも説明できるとしている。要約すると以下ようになる。

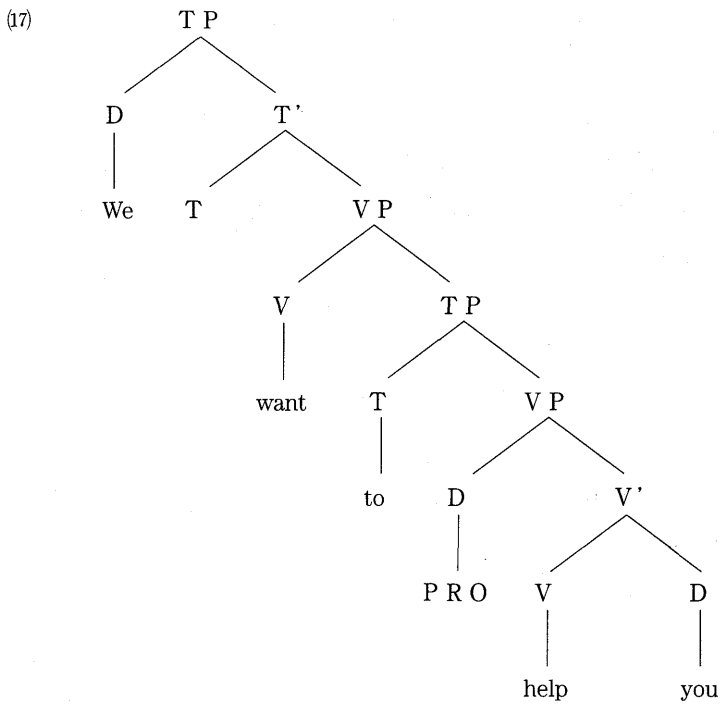
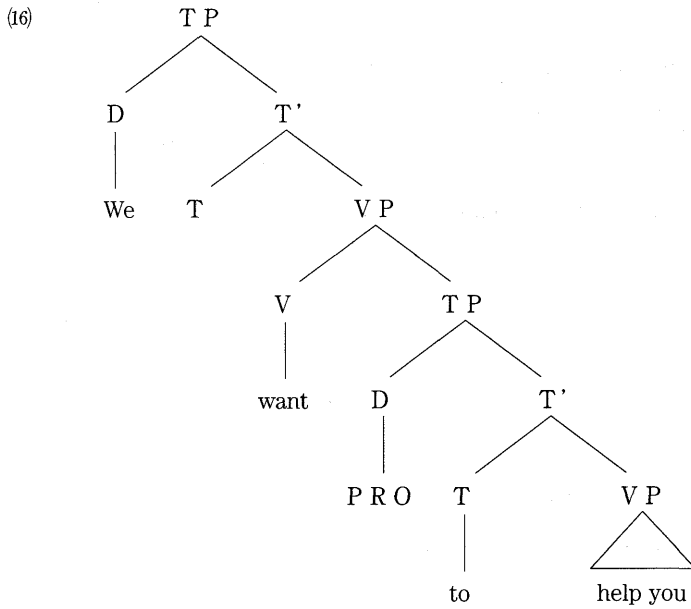
第 1 に、虚辞 there で始まる文とそうでない文との関連についてである。たとえば、(13a) は主語が元位置に止まっている場合であり、(13b) では spec-TP の位置に移動した場合である。(13b) の構造は(14)のようになる。

- (13) a. There is someone knocking at the door.  
 b. Someone is knocking at the door.



第 2 に、(15b) に見られるような接辞化についてである。もし、(15b) が(16)のような構造であるとしたら、空範疇の PRO が want と to の間に介在するので、接辞化は起きない。したがって、(15b) は(17)のように、PRO 主語は基底部では V P の指定部に存在する構造を持つものと考えなければならない。

- (15) a. We want to help you.  
 b. We wanna help you.





第3に、再帰代名詞について見られる現象である。再帰代名詞は一般に再帰代名詞を含む節内で局所的c統御を受けるのであるが、そうであるならば、(18)は動詞句前置の場合も含めて角括弧の中に先行詞がなければならない。したがって、(18)は概略(19)から派生されたと考えられる。

- (18) a. He certainly has [compromised *himself*/ \**themselves*]  
 b. [Compromised *himself*/ \**themselves*],he certainly has

- (19) [TP *He* certainly [T has] [VP t [v compromised]himself]

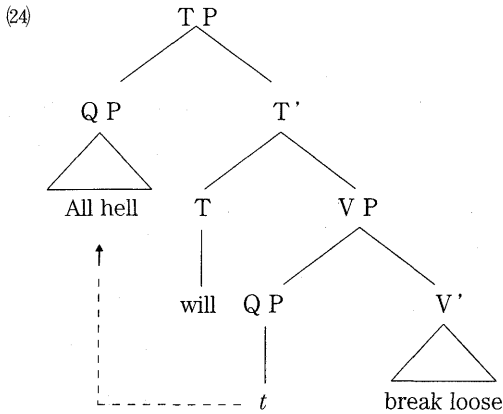


再帰代名詞に見られる現象は、(20)及びそれぞれの動詞句前置の場合にも当てはまる。

- (20) a. *They* probably will [t become millionaires/ \*a millionaire]  
 b. *John* certainly has [t damaged his/ \*my own credibility]  
 c. *You* definitely mustn't [t lose your/ \*his cool]  
 d. *We*/ \**I* never would [t hurt each other]  
 e. *They*/ \**He* really shouldn't [t live together]

第4に、文全体が慣用表現として、ひとまとまりになっているように観察される(21)のような場合である。(21)は(22)のように自由に主語やその他の部分を言い換えることができないほど慣用表現化しているにもかかわらず、(23)のように助動詞については自由に挿入することができるのである。これは(24)のような構造であるためと説明できる。

- (21) a. All hell broke loose  
 b. The shit hit the fan  
 (22) a. \*The whole inferno broke free  
 b. \*Camel dung was sucked into the air conditioning  
 (23) a. All hell *will* break loose  
 b. The shit *might* hit the fan

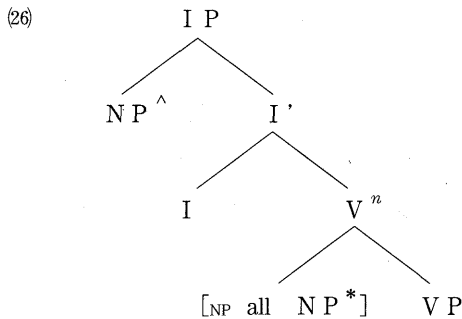


3.2 VP内主語仮説における遊離数量詞の扱い

Sportiche (1988) は、たとえば、(25b) は (25a) から派生したのではなく、VP内主語仮説に基づいて、主語がVP内からIP指定部に移動した結果、FQがVP内に残留したものであると説明する。

- (25) a. All the children have seen this movie.
- b. The children have all seen this movie.

この分析に従えば、(25a) は概略(26)の構造になり、FQは痕跡NP\*との間に修飾語-被修飾語の関係を依然として保っていることになる。



中村 (1996, 186) は、Sportiche (1988) には次のような問題点があることを指摘している。第1点は、FQの残留の問題である。Sportiche はFQの分布を(27)のような例で示し、^で示したすべての位置にFQは残留できるとしている。ただし、FQの容認可能性についてはかなりの揺れがみられ、#の位置については容認度が低く、(28)の will と have の間、つまり、^印の一番左の位

置がすべての人が容認する位置であるとしている<sup>(4)</sup>。

(27) The carpets # will ^ have ^ been ^ being ^ dusted for two hours. (Sportiche (1988, 442))

Sportiche によれば、I N F L, 法助動詞, 完了相の have, 受動態の be はすべて繰り上げ述語であり、V P 内主語が ^ 位置を通過して、主語の位置に移動する際に、その途中の着地点に F Q を残留させるということになる。これに対して中村 (1996) は、途中の着地点に F Q だけが残留するという考え方には難点があると考え。つまり、A 移動であろうと A' 移動であろうと、移動の途中で要素の残留を許すことはない。したがって、繰り上げ規則の適用の度に F Q の残留が行なわれると仮定することによって、F Q の分布を説明することはできないと考える。

第 2 点は、目的語の位置における遊離現象についてである。

(28) a. We saw all the children.

b. \*The children<sub>i</sub> were seen all t<sub>i</sub>.

Sportiche の考えによれば、(28b) は (28a) から N P 移動によって派生され、(28b) は文法的であるということになる。しかし、これは事実と反すると中村は言う。Sportiche はこの矛盾を、語彙規則によって説明できるとしているが、その詳細は述べられてはおらず、しかも、受動文の一般原則に違反する、と中村は言う<sup>(5)</sup>。中村は (28b) の非文法性を、A の上の A の原理によって説明できるとして、(29) の構造を提示している。

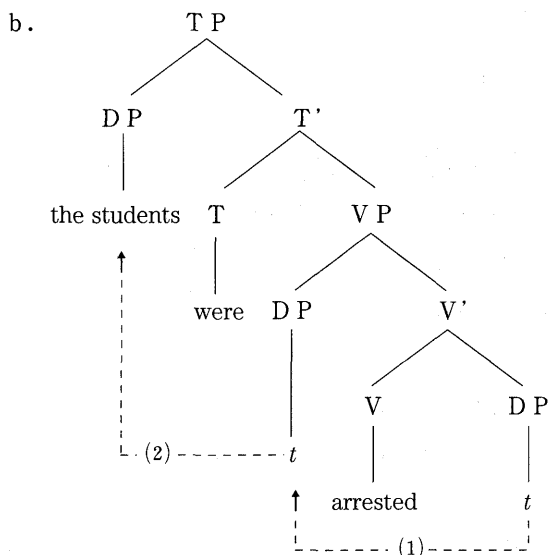
(29) [NP e] were seen [NP<sub>1</sub>[QP all]][NP<sub>2</sub> the children]

この構造では、NP<sub>2</sub> は NP<sub>1</sub> に埋め込まれているので、NP<sub>2</sub> を主語の位置に移動すると、その移動は A O A に違反する。したがって、(28b) の非文法性が説明できるとしている。

第 2 の問題点、すなわち、目的語の位置における遊離現象について、Radford (1997) は Sportiche (1988) を援用して次のような解決策を示している。

Radford は、(30a) は (30b) の構造を持つと仮定する。

(30) a. The students were all arrested



Radford は、二段構えの循環規則が適用されて (30a) が生成されると考える。最初に数量詞付きの決定詞句 (DP) all the students が VP 補部の位置から受動分詞 arrested の主語に移動し、次に the students が助動詞 were の主語になると考える。

中村 (1996) では、受動文の FQ は基底構造の目的語の位置に残留すると考え、その故に Sportiche の分析は誤りであるとしているが、たとえば、(30a) のような受動文がどのように生成されるのかについては説明がない。したがって、Radford の分析には妥当性があるとしておきたい。

#### 4. Baltin (1995) についての分析

##### 4.1 叙述関係における FQ

Maling (1976) は前述したように FQ とそれに後続する要素との間になんらかの意味的な繋がりがある場合には、その文は容認され、繋がりが認められない場合には非文となると述べている。

Maling は後続する要素は NP, AP, PP, VP のいずれであってもよい、としているが、それ以上の理由は説明していない。この点に関して Baltin (1995) は、再録するならば、(8) が容認されるのは FQ に後続する要素が前置詞付き与格か間接目的語であるためであり、(9) が容認されないのは拘束する要素が副詞的表現であるからであると述べている。

(8) a. I gave the kids all some candy to keep them quiet.

- b. The tooth fairy promised the kids each a quarter.
  - c. Dad bought the twins both bicycles for Christmas.
- (9) a. \*I saw the men all yesterday.
- b. \*She found the missing books both quickly.

Baltin (1995) は上記の記述によって FQ と後続する要素との間に叙述関係があることを示唆しているわけであるが、この論を発展させて、FQ とそれに後続する不定詞との間にも叙述関係が存在することを説明している。Baltin は基本的には Sportiche (1988) の V P 内主語仮説を支持する立場から、次の2つの質問に答える形で議論を進める。

- (i) 不定詞の主語が P R O であるとき、なぜ不定詞標識 *to* の前に FQ は生じえないのか。それに対して不定詞主語が語彙表示されたり、D P の痕跡であるときには、なぜ不定詞標識 *to* の前に FQ が生じうるのか。
- (ii) FQ が直接目的語とある種の動詞補部との間に生じうるのに対して、直接目的語と補部との間に挿入句が入ると、挿入句の前にも後にも FQ が生じえないのはなぜか。

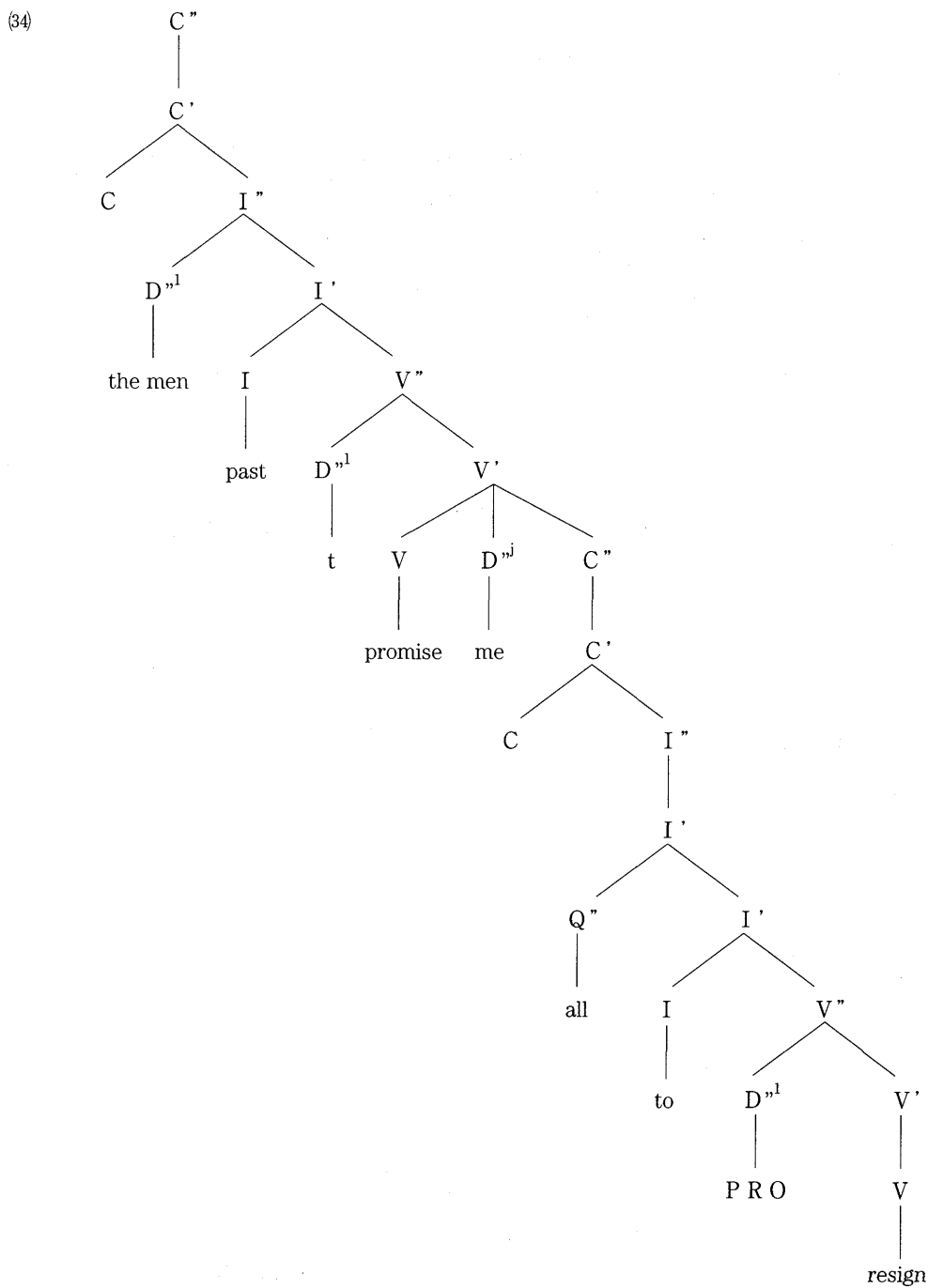
(31), (32)が (i) と (ii) に対応する例である。

- (31) a. \*They tried all to leave.  
b. I would prefer for these people all to leave.  
c. They seemed all to be happy<sup>(6)</sup>.
- (32) a. Give the books all to Sally though we may, it won't matter.  
b. \*Give the books all though we may to Sally, it won't matter.  
c. \*Give the books though we may all to Sally, it won't matter.

(31a) は不定詞の主語コントロールの構造に関わり、(31b) は不定詞の目的語コントロールに関わり、そして (31c) は上昇構文に関わる。まず、主語コントロールの補部構造と目的語の補部構造の非対称性についての Baltin の分析を見ることにする。

- (33) a. \*The men promised me all to resign.  
b. The men promised me to all resign.  
c. I persuaded the men all to resign.

主語コントロールの場合は、(33a) と (33b) にあるように、F Qは不定詞標識 *to* の前に来ると非文になり、不定詞標識 *to* の後に来ると正文となる。それに対して目的語コントロールの場合は、(33c) のように F Qは不定詞標識 *to* の前に生起する。Baltin は、(33a) の構造を(34)のように記述する。



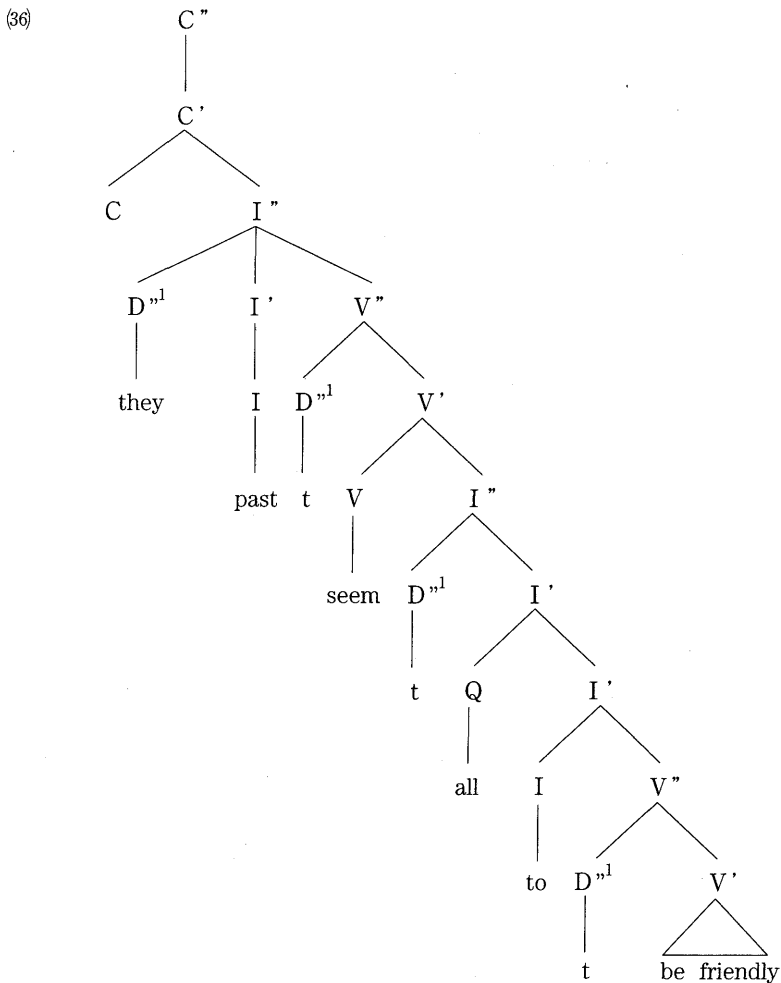
英語遊離数量詞研究の分析

(34)について Baltin は、DP (= D<sup>n1</sup>) である *me* は不定詞を最短距離で c 統御しているが、制御要素 (controller) ではないので不定詞の主語とはなりえない、したがって (33a) は非文となる。ただし、不定詞内の PRO 主語は、不定詞内の V' を最短距離で c 統御しているので V' は PRO との間で叙述関係が成立し、PRO の位置に FQ が生起でき、(33b) は正文となる、としている。

次に、(35) (= (31c)) のような繰り上げ構文における FQ の位置について分析してみることにする。

(35) They seemed all to be happy.

seem などの繰り上げ述語を持つ構文は、D 構造で補文の主語位置にあったものが S 構造に至る過程で、主節の主語位置に繰り上がる構造であるが、Baltin は、不定詞内にあった主語が繰り上がる過程で不定詞標識 *to* が主要部となり、FQ は *to* の中間投射の位置に生起する、と分析する。したがって、(35) は (36) のような構造を持つとしている。



次に、Baltin が第 2 のテーマとして取り上げた、叙述関係にある要素の間に挿入句が入る場合の分析に移ることにする。例として Baltin が挙げた(32)は、二重補部と挿入句との関係であるが、(32a) が正文であるのは、*give the books all to Sally* の間に叙述関係が成立しているためであり、(32b, c) が非文であるのは挿入句によって叙述関係が壊れるからであると Baltin は分析する。

- (32) a. Give the books all to Sally though we may, it won't matter.  
 b. \*Give the books all though we may to Sally, it won't matter.  
 c. \*Give the books though we may all to Sally, it won't matter.

Baltin はこの事実を、F Q と不定詞との関係においても説明できるとして、(37)の例で分析を行なっている。

- (37) a. \*Persuade the men though I may all to leave, it won't matter.  
 b. Persuade the men though I may to all leave, it won't matter.  
 c. \*Persuade the men all though I may to leave, it won't matter.

(37a) は、挿入句が入ることによって、不定詞が目的語コントローラー *the men* によって c 統御できなくなり、不定詞はもはや述部とは見なされないのが非文となる。(37b) が正文となるのは、P R O が V' を最短距離で c 統御しているので、V' の前に F Q を置くことができる。(37c) が非文であるのは、挿入句が V P の元位置にある F Q と叙述構成素とを隔てているためである。

Baltin の分析で興味深いのは、目的語コントロール構文では(38) (= (33c)) のように F Q は *to* の前に生起するとしているが、(37b) では、F Q が *to* の後に生起している点である。

- (38) I persuaded the men all to resign.

このことから、中村 (1996, 190) が述べているように(39)も正文となり、目的語コントロール構文の場合は不定詞標識 *to* の前にも後にも F Q が生起するということになる。

- (39) Persuade the men to all leave.



## 5. 残された問題と若干の提案

英語数量詞、特に、遊離数量詞についての研究は、以上考察してきたように、Maling (1976), Sportiche (1988), Baltin (1995) によって、大いに進展を見たと言えることができるであろう。しかもこの3つの研究が互いに深い関連性を持っていることを Baltin の記述によって知ることができる。すなわち、Maling の Q-Floating の仮説は Baltin の叙述関係 (Predication) の仮説に強い影響を与えていることをうかがい知ることができるし、Baltin の仮説は明らかに Sportiche を発展させたものであるからである。

生成文法の理論的枠組みは修正が何度もなされ現在の原理・パラメーター理論に至っている。初期の理論の中核を成した変形分析はもはや時代遅れとなり、文法研究の道具としては役立たなくなっているかに見える。Maling (1976) はその時代の論文である。しかし、ここ5年を区切って考えるならば、遊離数量詞に関する最も優れた論文と見なされている Baltin (1995) にも Maling が度々引用されているのは既述の通りである。分析法は古くなったが、そこには先見性があったわけである。巧みには説明できなかつたけれども Baltin (1995) の叙述関係の仮説に強い影響を与えたわけである。

Maling (1976) にはもうひとつ見逃せない指摘があったことをここで振り返って考えなければならぬ。それは、Q-Pro Flip のことである。詳しいことは繰り返さないが<sup>(40)</sup>が簡潔に Q-Pro Flip の現象を示している。

(40) I called them all/both/ \*each.

すなわち、NP が代名詞であるときには、たとえ文末であっても all と both は代名詞の直後に置くことができるという仮説である。NP が名詞であるときには、(41) のようにすべてが非文となる。

(41) I called the men \*all/ \*both/ \*each.

この仮説は変形分析に基づく下方移動の原理によって説明されている。(40) は現象としては事実であるから、もし、変形分析がもはや役に立たない理論であるならば、他の理論によって説明できなければならない。しかし、現在までのところ、この現象を納得できるようには説明できていないどころか、この現象についての言及も見当たらない。(42) は筆者 (寺田) の収集したものであるが、Q-Pro Flip が当てはまる例であろう。しかも、文末ではないので、Maling (1976) の仮説では説明がつかないものである。

- (42) a. the eyes of them both were opened (*AVB*)  
b. in front of them all, speak to the rock and it will yield its water (*NEB*)

さらに、(43)は、Maling (1876) の Q-Pro Flip によっても Q-Floating によっても説明できない。

- (43) They have won a prize each. (Quirk et al. (1972, 614))

(41)–(43)の例は、Sportiche (1988), Baltin (1995) でも説明できないであろう。

中村 (1996) は、数量詞が修飾する名詞句が固有名詞や総称的名詞句である場合の(44), (45)について、(44a), (45a)は変形分析では説明できないが、無仮説では説明できるとしながらも、(44b), (45b)が非文であることは無仮説でも説明できない、としている。これも残された問題である<sup>(7)</sup>。

- (44) a. I found John and Jack and Sue all sitting on a park bench.  
b. \*I found all (of) John and Jack and Sue sitting on a park bench.  
(45) a. The lion, the bear, and the monkey are all mammals.  
b. \*All the lion, the bear, and the monkey are mammals.

別の観点から問題点を指摘してみたい。1つは遊離数量詞の意味論的解釈の問題である。中村 (1996) は遊離数量詞は個別的解釈 (individual reading) を持つとして、(46), (47)を例にして説明している。

- (46) a. All these books are worthy of fifty dollars.  
b. These books are all worthy of fifty dollars.  
(47) a. All these books together are worthy of fifty dollars.  
b. \*These books together are all worthy of fifty dollars.

(46a) は多義で、「本全部で 50 ドル」の解釈と「すべて 1 冊 50 ドル」の解釈の二つがあり、あいまいである。これに対して、(46b) には「すべて 1 冊 50 ドル」の解釈しかない。このことは総和性を表す together が入った(47)の容認性の相違で証明できる、と中村はしている。太田 (1980, 342) では普遍数量詞のうち all, every, each が個別的読みを持ち、all には集団的読みと個別的読みの両方があるのに対して、each は個別的読みを強調する場合に用いられ、every はその中間である、としている。

Sportiche (1988, 445) は結論部分で、遊離数量詞には前方照応的な働きがあるとして、(48)を例

に挙げて、NP 痕跡が語彙表示されたもので一種の照応形であるとしている。

- (48) a. The men had [all three] known Garbo.  
b. The men had [all three of them] known Garbo.

一方, Baltin (1995, 211) は, 遊離数量詞には *ever* と同様に「動詞前に付く副詞」(preverbs) の働きがあるとして, 主語コントロールの不定詞と目的語コントロールの不定詞における遊離数量詞と *ever* の振舞いの類似性を(49)を用いて説明している。

- (49) a. I believe these people all to have left.  
b. For these people all to leave would be inconvenient.  
c. I would hate for these people ever to find out they were wrong.  
d. \*I would hate ever to find out that I was wrong.  
e. I would hate to ever find out that I was wrong.  
f. I didn't believe these people ever to have actually lied.

これらのことは, 遊離数量詞が統語的にも意味的にも複雑な働きを持っていることを示す証拠であると考えられよう。

以上を総合してみると, 遊離数量詞は先行詞と同格関係を持つのではないかという考えに導かれる。(50)について若干の分析をしてみよう。

- (50) a. The people all answered together. (NEB 以下出典は同じ)  
b. Why am I to find meat to give you all?  
c. Why should I lose you both in one day?  
d. They were all wiped out over the whole earth.  
e. They were both naked, the man and his wife.  
f. This is the land which you shall assign by lot, each taking your own territory.  
g. One night, when they had been in prison for some time, they both had dreams, each needing its own interpretation.

(50)から以下のことが言える。

- (i) 叙述関係をとりあえず考慮しないならば, 遊離数量詞は主語や目的語の直後に来ることがで

## 英語遊離数量詞研究の分析

きる。(50a) の場合には the people = all の関係を保ち、しかも、この例では興味深いことに、中村 (1996) の分析とは違って遊離数量詞 all と together が同一文中にあるので、all は、太田 (1980) が言う集合的読みを表すものと解釈できる。

- (ii) V P 内主語仮説を裏付ける位置、つまり、述部内に遊離数量詞は来ることができる。しかも、主語との関係は、(50d) のように they = all の関係を保っている。
- (iii) 独立分詞構文の主語の位置に遊離数量詞は来ることができる。(50f) の場合、each は you の代理として置かれ、個別的読みを持っている。

以上の現象に見られる遊離数量詞は、ほとんどすべてが再帰代名詞や ever とは違った振舞いをしており、先行詞と同格関係を持っていると説明したほうがよいように思われる。

英語の存在数量詞が遊離できない理由は、存在数量詞が先行詞 NP との間に同格関係がないためであると説明することができるであろう。

## 注

- (1) この小論は、中村 (1996)、三原 (1998) に触発されて書くことができたことを感謝の意を込めて記しておきたい。
- (2) 寺田 (1992) では日本語数量詞の二重の量化の問題を扱っている。
- (3) 次の例は Maling の Q-Pro Flip では非文とされる each の反証と考えられるものであるが、現在までのところ 1 例にすぎないので詳しく扱うことは他日に譲ることにする。  
This is what their father Jacob said to them, when he blessed them each in turn. (NEB)
- (4) Sportiche (1988, 443) は # 位置に F Q が生起するのは英語の話題化現象のためではないかと推測している。
- (5) Baltin (1995, 229) も中村と同様の主旨で Sportiche の不備を指摘している。
- (6) 説明の順序の都合から、Baltin (1995, 200) が挙げた例の b と c を入れ替えてある。
- (7) Sportiche (1988, 440) は主語の位置に来る数量詞と F Q とは別の扱いをすべきであると述べている。

## 参考文献

- 安藤貞雄他. 1993. 『生成文法講義』. 北星堂書店.
- Baltin, Mark. 1995. "Floating Quantifiers, PRO, and Predication," *Linguistic Inquiry* 26:2, 199-248.
- Koopman, H. and D. Sportiche. 1987. "Subjects," ms., UCLA, Los Angeles, California.
- 三原健一. 1998. 『生成文法と比較統語論』, くろしお出版.
- 中村 捷. 1996. 『束縛関係－代用表現と移動－』. ひつじ書房.
- 太田 朗. 1980. 『否定の意味』. 大修館.
- Postal, Paul. 1974. *On Raising*. MIT Press. Cambridge, Mass.
- Quirk, Randolph et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman, London.
- Radford, Andrew. 1997. *Syntactic Theory and the Structure of English*. Cambridge.
- Sportiche, D. 1988. "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure,"

英語遊離数量詞研究の分析

*Linguistic Inquiry* 19:3, 425-449.

寺田正義. 1992. 「日本語の数量詞移動について」, 『成田義光教授還暦祝賀論文集』 33 - 45. 英宝社.

資料文献

*The Authorized Version of the English Bible.*

*The New English Bible.*